ラ・サール 生物部短報

1963 6月　No 1

一、創報に際して――

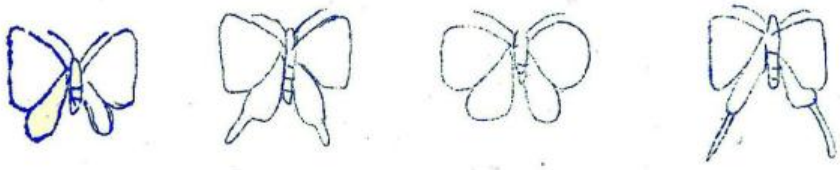
昨年、われわれ生物部の活動状況や、研究の成果を発表する為に、部誌の発行の計画があった。しかし予算の事などで終に実現できなかった。本年こそはと思っていたが予算が少いので実現しそうにない。それでその代りに、小いけれども短報を出すことになった。この短報によってより多くの人に生物の内容を知ってもらいたいと思う。これを土台にして近いうちに本当の部誌を発行したいと思っている。　(2A　久木野)

第一号はいろいろ都合もあって　私(久木野)が一人で担当することになった。今後は何人かの協同報等として発行するつもりである。内容も　ただ発表等だけでなく、バラエティーに富んだ　おもしろいものにするように心がけたい。

発行予定はだいたい月一回を基本とし、その他変ったことがあった時には、そのつど発行するつもりである。

ガリ版発行なので、見苦しい点や　まちがった所もでてくると思うが、その点はおゆるし願います。

'63 6月



オ一号として、私はモンシロチョウの事についていろいろ書こうと思う。モンシロチョウといへば、私達にとってもっともなじみの深い蝶である。しかしなじみが深いからといって、"オスとメスはどこがちがうのか"、"1年にどのように発生するが"等と聞かれるととまどう人も多いと思う。現にこの私も少しとまどいがちなのである。それで以下に、本を参考にしたり、又私の少い体験をもとにしてモンシロチョウの事を書いてみた。未熟な私なのでまちがいがありましたらどしどし注意して下さい。

(1) モンシロチョウ Pieris rapae crucivora Boisduval

モンシロチョウというのは、白いチョウに黒い紋があるところから来たのである。

① 分布

日本各地に普通である。

② 幼虫の食草

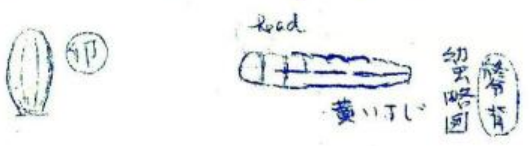
ハタザオ、ツルダガラシ、カラシナ、ハクサイ、キャベツ、ダイコン、ワサビ、アブラナなどの種々のアブラナ科植物。その他フウチョウソウ科植物もたべる。

③ 卵

卵は主として食草のうらに一個ずつうみおる。ラグビーのボールのようにはそ長く、たてに何本かのすじがある。径は0.4mm 高さ0.8mm位である。ハクサイ等のうらをみると、白みかかった卵と黄い卵があるが、白いのはうみたてのもので、黄いのは生んでしばらくたったものである。卵は多くとも1週間ほどでフ化する。

④ 幼虫

幼虫はフ化したてのころは、茶色かかった色をしている。大きくなるにつれて、みどり色になってくる。そして背中に黄色い線がでてくる。又体には小いモがたくさん生えている。幼虫はだいたい終令では3cmに少したりないぐらいの大きさである。令数は5令までなる。その他特ちょうはあるがはぶく。



③・蛹

体長21〜22mm位で、色は緑〜灰色などであるが、これは蛹化した場所によってちがうそうである。蛹化する場所はいろいろで、草のかげや、かきの木など種々である。

④ 発生経過

越冬態は蛹で（暖地では幼虫のこともある）暖地では5〜6回、寒地では2〜3回の発生。

以上は主に本を参考にして書いたが、以下私の体験と鹿児島県内のことに少しふれてみたいと思う。思いつくままに書いたので序が悪いかもしれません。

① ♂と♀の見わけ方

1ばん確実なのは、交尾器によって見わけることである。しかし一ぱんにメスは♂よりも色が黒っぽいから容易に見わけられる。

② 寄生

モンシロチョウの幼虫、俗にいうアオムシは野菜の害虫である。だから当然というわけでもないが天敵がいる。ハクサイや、キャベツの葉をめくって幼虫を観察すると時々、幼虫のまわりに白か黄色の小さい粒がついていることがある。あれは寄生バチのマユである。「鹿児島県の蝶類」には、寄生バチの一つとして アオムシコマユバチという名があがっている。その他にも寄生バエもあるそうである。だからもし幼虫をとってきて飼育するときは注意しなければいけない。寄生バチは幼虫を生かしながらその体の中をあさりくっているのである。幼虫は生きたしかばねとなるのである。

③ 訪花植物

広角、モンシロチョウが花をおとずれるのは何度もみたが、その名ははっきりおぼえていない。しかし春の菜の花だけは印象がふかい。以下は「鹿児島県の蝶類」よりのぬすみである。

・スミレ、・アブラナ・キャベツ・ハボタン・ダイコン・カタバミ

・クローバ　・ネズミモチ　・バラ

※私の記憶にあるもの

・野バラ　・さきバブラを　・ミヤコグサ　・よめな　・アザミ

・発生

鹿児島に於ける発生についていってみるとする。鹿児島では、この蝶のみられぬ月はないといってもよい。もっとも県北部ではちがうかもしれない。私自身 1961年1月3日に谷山市で数頭のモンシロチョウを見た。南部にいけばもっとみられるだろう。しかしこの蝶が多いのはナノハナの咲くころで、この花がさくのと同時に月だって多くの蝶がみられる。しかしナノハナがちると一時的に少くなる(鹿児島市での観察)そしてそれからじょじょに多くなり、何回も発生をくり返すようである。しかし夏の7～8月は数は少いように思われる。そして9～10月にかけて又多くなるそれからは又少くなってゆく。このように見られる傾向はないと言っても、その発生には波があるわけで、又一年の確実な発生経過は合っていない。

・渡　渡りについて

この蝶は集団となって渡りを行う蝶としても有名である。県外のことはあまり知らないので、県内のことについて述べる。以下は「鹿児島県の蝶類」よりの抜粋である。

※渡りについて気付いた点

① 時期は5月上旬で最も数の多い第二化が移動。

② "さわやかな5月晴れ"の日が久しぶりにおとずれたという感じの日

③ 午後ともする

④ あまり風にさからわず、むしろゆるやかな風にのって海面から30m以内の所を相当多数となってとぶ

⑤ 海上だけでみられて陸上ではみられない

⑥ 渡って来た所に大害を与えるということはない。

⑦

・私も魚つりに行った人から時々海上で渡りに出あったということを聞いたことがあるがよくおぼえていない。又去る5月中旬ごろ、雨があがった時、たくさんのモンシロ蝶がラッサールの校庭にとぶのが見られた。これも

渡りだったかもしれない。　ヌニの渡りは県内では鹿児島湾に於て多く見られ北より南への移動の記録はなく常に北上するのはおもしろいことだと思う。今後わたりを発見したら、その時の状況などをお知らせ下さい。

◦ 飼育

この蝶の飼育はとてもやさしいので、興味のある人はぜひやるべきである。　卵はヤサイの植えてある畑などにいって葉のうらをめくると大ていみつかる。幼虫からやる人は、寄生バチのついたのには気をつけなければならないが、寄生バチのついた虫の飼育もおもしろいので一回ぐらいはやってみるとよい。

容器の中へ食草を入れ卵を入れてかうとよい。幼虫のえさは、新鮮にして、フンにはカビがつかぬよう清潔にしておくべきである。蛹になる時は容器のまわりなどに何か、蛹になる前に何か適当な木切れなど入れてやるのもよい。　卵より羽化まで1ケ月と少し位である。羽化させる時、蛹は適当な大きさの容器で羽化させないと羽がのびきれないでだめである。その時も羽化直後の成虫がつかまるものを入れてやるとよい。　要するに清潔にしてやると大ていは成功するものである。

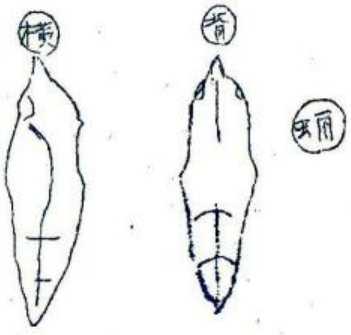
◎ その他

・私の記憶によると、この蝶を　人工のエサでかったという記録を読んだことがある。たしか、キャベツの成分を人工で作って飼ったそうである。いくらかは成功したそうで、こんごだれかにやってもらいたい実験である。

・モンシロチョウの寝場所

今まで観察した所では、大ていは草の葉などである。朝早く野原を歩くと、眠っているモンシロチョウに出あうことがあるので、注意するとよい。

・モンシロチョウの交尾の際　オスが下かメスが下になるか等もおもしろいテーマだと思う。観察したら知らせて下さい。

以上が第一号のモンシロチョウに関する報告です。以後よりよいものを書きたいと思っております。

(K、K)